

研究ノート

# 持続可能な観光における来訪者モニタリング調査方法の検証 —中部山岳国立公園上高地を事例に—

中澤 朋代

Research on Qualitative Monitoring Methods in Sustainable Tourism:  
A Case Study of Kamikochi, in Japan's Chubu Mountain National Park

NAKAZAWA Tomoyo

## 要 旨

感染症パンデミックを終えて国際観光到着数が回復するにあたり、持続可能な観光への各地での取り組みはますます求められている。政策・戦略策定には基礎データの収集が必要であり、持続可能な観光の世界基準に基づけば、各項目の継続的なモニタリングが重要である。本論は中部山岳国立公園上高地を事例に、現地では観光地の戦略策定のための来訪者の行動把握が不足していることを受けて、実際に観察調査と分析をした上で調査方法を検証した。当該地域の持続可能な経営には、滞在したい環境の整備や、自然に親しむしかけ、観光客の分散の課題が見られた。本調査方法は妥当な指標で観光行動がデータとして蓄積できたが、諸課題は残った。

## キーワード

持続可能な観光 国立公園の利用 来訪者の行動 モニタリング 観光地管理

## 目 次

- I. はじめに
  - II. 調査の目的と背景
  - III. 調査方法
  - IV. 調査結果
  - V. 持続可能な観光経営の分析
  - VI. 結語
- 謝辞  
参考資料  
注  
文献

## I. はじめに

2005年にUNWTOが持続可能な観光の定義<sup>1)</sup>を発表して以降、持続可能な観光(サステナブルツーリズム)はエコツーリズムの拡大概念として注目され、世界レベルでオーバーツーリズム対策や過疎地での交流・関係人口増加策を含む観光地域づくりへの有効なツール開発が進められてきた。2008年から公表され改定が続くグローバル・サステナブル・ツーリズム協議会(GSTC)の認証基準は、観光に関わるすべての地域及び事業者が、最低限満たすべき基準として精査されたもので、世界に氾濫する観光認証制度を保証する仕組みとして機能している<sup>2,3)</sup>。その内容は、持続可能なマネジメント、社会経済的影響、文化的影響、環境への影響の4分野にわたり、計38項目の基準に対して174項目の指標が表示されている<sup>4)</sup>。ここで示される基準は「どれほどできているか」よりも「何を行うべきか」が明示されているとの理解が適当である。

2020年に観光庁はGSTCの認証基準を基にして、日本版持続可能な観光ガイドラインを発表した<sup>5)</sup>。わが国にはGSTCに基づく固有の認証制度はなく、観光庁等の事業を通して既存の認証団体であるグリーン・デスティネーションズ(本部：オランダ)などの認証制度を用いた運用が各地で進められている。日本各地における認証への取組みの課題としては、観光地を管理運営する政策の有無、管理組織の有無、モニタリングの方法及びシステム化があげられる。そのうちモニタリングについては、社会経済的、環境影響に関する調査はこれまでも手法が比較的確立されている一方で、観光地管理と社会文化的事項のモニタリングに関しては、その手法は地域により異なるため、開発及び実施が課題である。例えば観光地管理の課題に関し、オーバーツーリズムの回避を目指し、複雑な因果関係を数値化する観光地管理のためのシステムダイナミクスモデルを開発する古屋(2022)の研究<sup>6)</sup>においても、事例地域の観光地特性に合わせて手法が検討された。今後各地での持続可能な観光に取り組みにあたり、各地域における実現可能で有効なモニタリング手法の開発は重要な課題といえる。

## II. 調査の目的と背景

さて、こうした認証制度の発展過程と課題を手がかりに、観光地域において不足する観光地管理と社会文化的な視点でのモニタリングの必要性に着目し、実証的に検証するため、本研究の事例地として中部山岳国立公園南部地域の有名景勝地である上高地を選定した。当該目的地は長野県西部に位置し、行政区は松本市、旧安曇村である。

### 1. 上高地の概要と上高地ビジョンの策定

国立公園はすぐれた自然を守り、後世に伝えられるように国が指定し、保護し、管理する制度であり、世界の旅行者からその存在が注目されている。我が国の国立公園制度は民有地に網掛けする「地域制国立公園」の特徴を持ち、国立公園内を見渡せばどこにも地域の暮らしの歴史と今が存在しており、地域と国立公園管理の連携の重要性はますます高まっている<sup>7)</sup>。上高地の産業史の概況は、江戸時代から旧安曇村(現松本市)の一部地域住民が生まれながらに定められていた御用材としての林業の舞台であり、高冷地での農林漁業の取組みを経て、養蚕業が発達して途絶え、その後の近代化の中で村を通貫する梓川において昭和の電源開発がなされ、上高地の特別景勝、特別天然記念物、国立公園の指定を受けて、現在は乗鞍高原・白骨温泉を含む自然観光が発達した。したがって、観光産業は中山間・山間地域における重要な地場産業であり、従事者にはその末裔も多い<sup>8-10)</sup>。一方、上高地では繁忙期(開山期)が限られており、産業としての脆弱性がある。自然観光地における観光の入れ込み状況や季節変動、自然災害や感染症等パンデミックによる急激な変動は、地域の人材の流動や企業経営に大きく影響を与えてきた。

これまで国立公園として先行した取組みを続けてきた上高地では、2014年に国内で初めて、公園地域のあり方や観光客の受け入れについて「上高地ビジョン2014」<sup>11)</sup>を策定し、地域と連携して体制整備を進めてきたことが評価されている。中心となる環境省中部山岳国立公園事務所では、上高地ビジョンにある5つの項目について常時データを収集し、分析し、毎年度末に上高地連絡協議会を設置して進行状況の

自己・相互評価を行っている。近年の課題としては、河床上昇の課題や野生動物との共生の課題とともに、持続可能な自然観光地としての受け入れ目標や施策を精査することが注目されている。2014ビジョンでは受け入れ方針について将来像を示すことはできたものの、短期から中期的な具体的目標を立てることは難しかった。当初の上高地ビジョンの策定から10年が経過して2024年に改定を迎えるタイミングで、エビデンスに基づいた持続可能な観光地管理計画を設計し、受け入れ戦略を構築することが地域経営の観点からも重要といえる。

## 2. 松本市観光統計からみた上高地

今回の行動観察調査について観光動向の量的データを補うため、行政が公開する観光統計のデータを整理した。松本市観光統計によると<sup>12)</sup>、2022年度の上高地訪問者数は873,400人であるが、新型コロナウイルス感染症前までは例年12万人台を推移していた(表1)。このうち、2019年のパンデミック前年を基準年とすると、松本市を訪れた観光客数は1,240,600人で、うち訪日観光客数が231,105人の18.6%であり、8割以上は国内観光客が占めていた。同年の松本市国内旅行動向調査(アンケート調査)からは、国内観光客の松本市における主な訪問先は、第1位が松本城、次に上高地となっており、訪日観光客の主な訪問先としては松本城、松本駅前に続き、上高地が第3位で、訪問経験のない国内の人からも上高地という観光地の認知度と興味度は松本城に次いで高かった。上高地は国内外において知名度及び人気がある目的地といえるが、未訪問者の一部回答からは上高地が松本市に位置することを知らない人もあった。

ビッグデータを用いた松本市訪日観光客の位置情報調査<sup>13)</sup>では、上高地河童橋では台湾人の観光訪問が5割を占め、続く香港、タイなどアジアだけで9割

の旅行者が占めた。このうち宿泊利用は香港、台湾で8割を占めるほか、小梨平の訪問は台湾、香港、タイの方で8割を占め、大正池の訪問は台湾、香港、タイの方で10割であった。小梨平と大正池は自然環境への遊歩道が整備され、行動観察調査と合わせるとほとんどの人が遊歩道の散策をしていることが想定される。また、全体的な位置情報から分かる周遊傾向<sup>14)</sup>は、県内観光客は松本市内1か所の訪問、国内観光客は安曇野市または長野市とのセット、訪日観光客は岐阜県高山市とセットでの観光訪問が高いことも分かっている<sup>15)</sup>。

松本市を訪れる訪日観光客は2023年においては順調な回復傾向にあり、もともと春～秋にかけて訪問が主なことから(図1)、開山期の上高地に多くの割合の訪日観光客が訪れている可能性が高い。実際に、行動観察調査日においても訪日観光客の姿やバスツアーは多く、全体的にアジア圏を中心に訪日観光客が増加していることが感じられた(図2)。

日本国内では概ね2015年以降にインバウンド観光客が大きく増加しており<sup>15)</sup>、中部山岳国立公園南部地域である上高地においても同様である<sup>16)</sup>。コロナ禍においては国内観光客が密集を避けて自然観光地に向かう傾向があり、上高地の観光客の戻りは他地域に先行していたものの、例年の半分に満たなかったが(表1)、2023年シーズンはさらに多くの訪日観光客ツアーが戻ったことで、現地では以前のような賑わいが観察されている。

このように、これまでの観光調査は観光客の数量調査を軸に、宿泊滞在や訪問目的等のアンケート調査が行われてきたが、観光客増加もしくは満足度向上のためのマーケット分析をその主な目的としてきた。また国立公園として環境省の管理下において、観光地管理主体は協議会組織が形成され明確化し、環境省による環境影響評価が継続的になされてきた。しかし、訪問者のニーズに対する適切なサービスや、

表1 上高地の入山者数(年毎の人数)

新型コロナウイルス感染症の流行期										
2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年
1,373,800	1,384,500	1,277,800	1,236,700	1,232,800	1,226,000	1,238,100	1,240,600	427,200	517,100	873,400

出典)松本市観光統計より著者作成

観光が与える地域への影響などに関する調査は十分とはいえ、現在の上高地の入山者数が目指す受け入れ人数として適正であるか、サービスの質はどうか、地域経営として適切か、といった観光地の受け入れの最適化の設定を困難にしている。ビジョン策定を前提に上高地の現在の取組みとGSTCの基準を照らし合わせてみると、A. 持続可能なマネジメント分野の「8来訪者数と活動の管理」、またはC. 文化的サステナビリティ分野の「6文化的な場所における来訪者の管理」、D. 環境のサステナビリティ分野の「2自然的な場所における来訪者の管理」に関しては、入込数の蓄積はあるが行動様式については基礎情報がない。こうした視点から、将来ビジョン構築

を目的に見据え、上高地エリアを俯瞰した量的かつ質的な観光行動の把握が必要と考えた。

そこで本研究では、上高地においてサンプリングした日程において、実際に訪問者の個別の実態を量質共に調査することにより、滞在客の行動に関する基礎的データを得ることを試みた。また、当日の現地調査は実施エリアに限られることから、先の松本市の統計データと合わせて解析することで、それら利用者の行動を分析した。分析の結果を踏まえ、今後の上高地の観光客受け入れのあり方について考察すること、また、持続可能な観光へのモニタリング調査としての有効性を検証することが本研究の目的である。

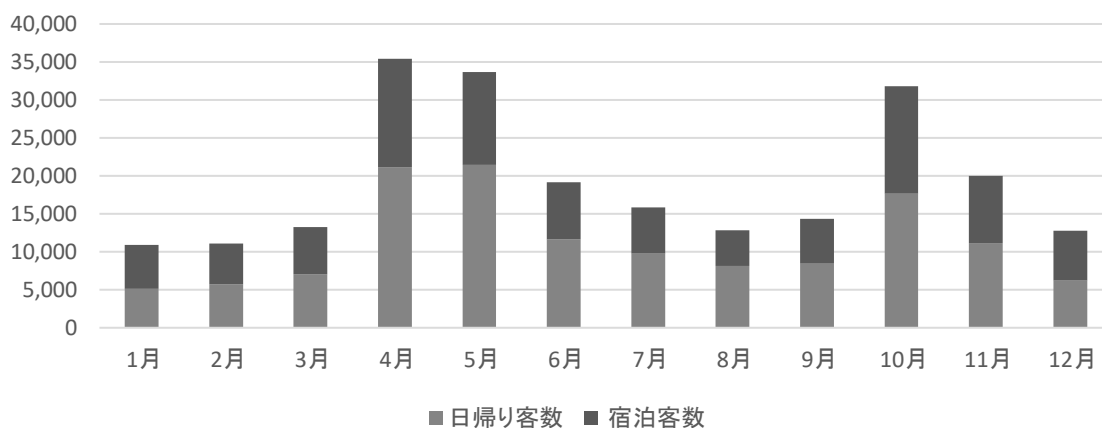


図1. 松本市への月別訪日観光客数(2019年)

出典)松本市観光データ調査分析事業業務レポート2023より著者作成



図2. 訪日観光客のツアーバス

### Ⅲ. 調査方法

今回の観光行動調査の方法論を以下に示す。上高地散策に比較的多くの人を訪れると思われる13カ所の調査地点を設置し(図3)、調査シート<sup>文末資料1</sup>を使い、2023年6月16日・17日の2日間にわたる観察により観光行動調査を行った。調査日はいずれも晴天であり、多くの観光客の姿があった。調査者は、松本大学総合経営学部観光ホスピタリティ学科の必修講義「観光概論B」を履修する学生92名が1日目午前、午後、2日目午前、午後の計4回の調査グループに分かれ、各回13カ所の調査地点に対して2~3人ずつ配置して記録した。各調査地点での調査者を複数名としたのは、記録方法の相互確認と学生の不安解消、環境省のガイダンスに従い行動中の注意事項と安全管理について相互で協力できる体制を取るためである。さらにこの2~3人は、同じ調査地点でそれぞれ別の方角を分担し、行動を共にする観光客をグループ単位にて行動を観察してもらった(図4)。調査する学生には中部山岳国立公園の概要を各自で調べる

課題を出した上で、事前ガイダンスとして目視による観光客の行動記録を複数名で行うことや、指定のフォーマットで数値化すること、調査の意義及び行動の注意点について事前に説明した。主な調査項目としては、滞在時間、グループ人数、属性を明記した上で、複数の観光行動の記録である。本調査は量的、質的調査の両方を求めることから、調査時間の滞在者の観光行動をできるだけ多く拾えるように訪問者へのヒアリングは行わず、もしも相手からの近寄りで会話が発生し、特段調査に影響がない場合には、それを避ける必要はないとした。観光客の属性判断については記載欄を設けたものの、見た目で見定できる範囲での分類としており、実際のところ精度はまばらであった(図5)。例えば二人組の内実や、出身国の違いにより観光行動が大きく左右されることが考えにくいことから、分析では属性を使用せずとした。調査の時間帯は2日間ともに10:00~12:00、13:00~15:00のうち各1時間程度であり、2日間で合計4,095人、1,571グループの観光行動を記録した。

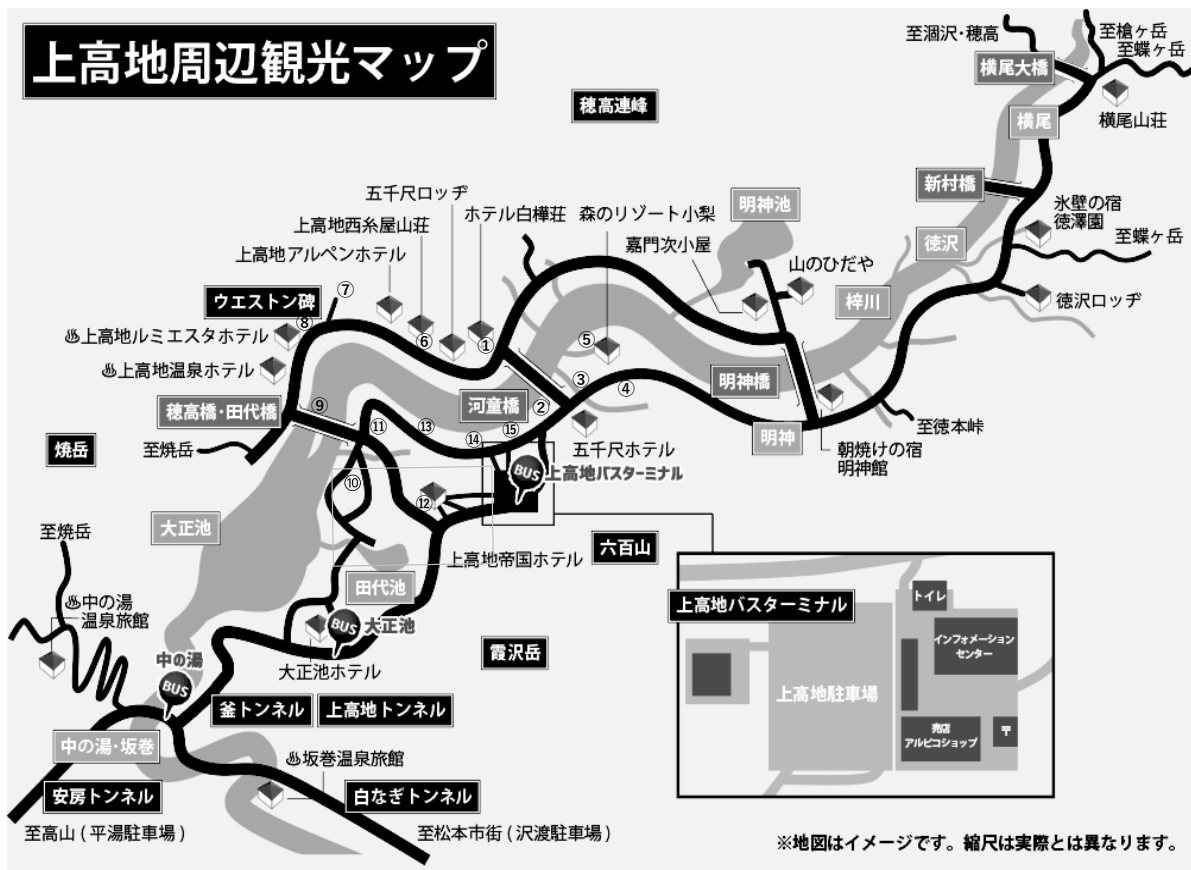


図3. 調査ポイントの設置①~⑮ 上高地観光マップを元に作成

### 調査概要

2023年6月17日10:00～12:00のうち1時間程度、調査者22名  
 6月17日13:00～15:00のうち1時間程度、調査者22名  
 6月18日10:00～12:00のうち1時間程度、調査者24名  
 6月18日13:00～15:00のうち1時間程度、調査者24名  
 調査ポイント：13カ所  
 調査方法：ポイントを通過、滞在する観光客の行動を観察し、調査用紙に基づき記録する

## IV. 調査結果

以下、2023年6月17日・18日に上高地を訪問した観光客の行動調査の結果を示す。

### 1. 各地点での観光行動(全般)

予定調査地点は以下の表2のとおり15カ所であるが、当初設定した⑩、⑫の2カ所については、当日の移動時間や調査人数の変更等の理由で困難であり、削除しても調査結果に影響が少ないと判断して4回ともに調査せず、とした。表2は、各調査地点にて多く観察された主な過ごし方、滞在時間、施設と



図4. 調査の様子

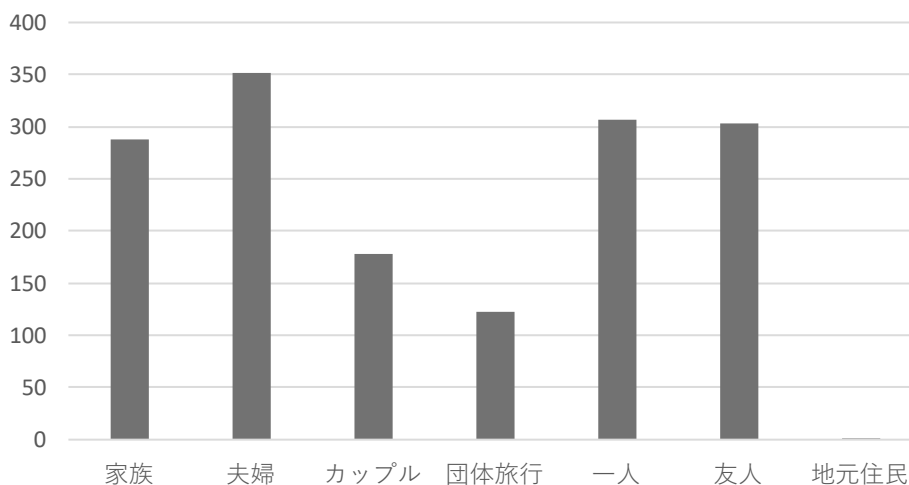


図5. 2日間の平均属性(2019年)

(調査者による見た目による分類であり、あくまで参考値)

ともに一覧化したものである。また、表示した主な過ごし方は集計上の上位2つの掲載であり、その詳細については、続く調査地点毎の結果グラフに譲る。

全体での平均的な上高地での過ごし方は図6のとおりで、ハイキングが28%、写真撮影が24%、会話

が23%で計73%と多くを占め、多くの人が歩きながら写真を撮り、会話を楽しむなどしていた。続いて自然観察、飲食、史跡や看板を見る観光行動が見られた。

表2 上高地の各地点での観光客の過ごし方

	〈調査地点〉	主な過ごし方	平均滞在(分)	広場	ベンチ	売店	トイレ
①	河童橋右岸(白樺荘前)	会話、写真撮影	9.26	○	○	○	
②	河童橋左岸(河童食堂前)	写真撮影、会話	11.00	○	○	○	○
③	清水橋付近	写真撮影、自然観察	4.00				
④	小梨平ビジターセンター前	自然観察、史跡看板	10.78	○	○	○	○
⑤	小梨平キャンプ場河畔	散歩、写真撮影	12.19	○	○		
⑥	西糸屋山荘前	散歩、会話	11.00		○	○	
⑦	ウエストン園地周辺	散歩、会話	8.17	○	○		○
⑧	ウエストン碑広場	写真撮影、史跡看板	2.34				
⑨	穂高橋・田代橋	写真撮影、散歩	4.00				
⑩	田代池分岐	遠方のため調査せず					
⑪	中野瀬園地周辺	会話、写真撮影	6.96	○	○		○
⑫	上高地帝国ホテル	人数配分で調査せず					
⑬	吊尾根ビュースポット(ベンチ前)	散歩、写真撮影	4.00		○		
⑭	梓川左岸バスターミナル裏	散歩、会話	4.00				
⑮	梓川左岸遊歩道 望遠鏡広場	散歩、写真撮影	3.00				

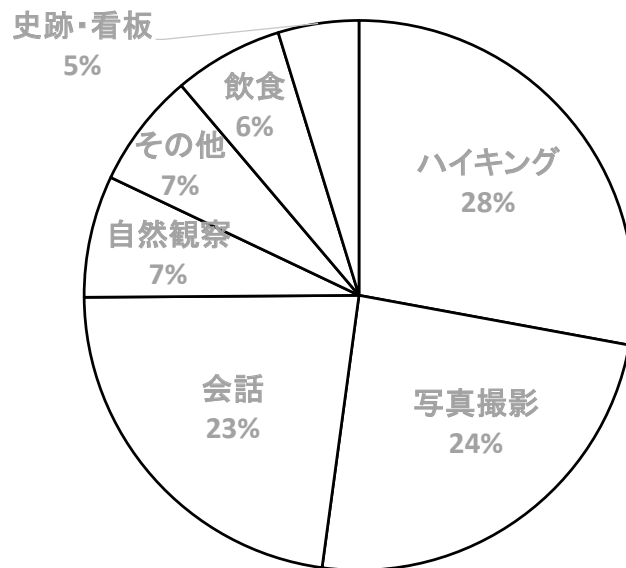


図6. 上高地における過ごし方の割合

## 2. 各地点での観光行動(個別)

さて、それぞれの調査地点での過ごし方について、観光行動とその人数、滞在時間とグループ人数に分けて分析したところ、以下の結果であった。なお、滞在時間が明確に記録されなかったデータを除外してグラフ化したため、滞在傾向の表についてはデータ数が少ない地点がある。

### 1)調査地点①河童橋右岸(白樺荘前)

調査地点①は、上位から会話、写真撮影、散歩であった。梓川右岸に河童橋を渡ったエリアであり、白樺荘の前は広いスペースがあり、常に人が多い地点である。過ごし方としてはビュースポットであることから写真撮影が多く、また近くに土産屋とレストランがあるため飲食や、河原で過ごす人も多い。ゆっくりと過ごすことに関連し、会話をしている人が多いのも特徴といえる。ここでの滞在傾向は、グループ人数に関わらず30分以内が大多数であり、家族やグループでの食事や飲酒を伴う滞在で30分を超える滞が見られたほか、最大滞在時間は夫婦で写真撮影と食事をする行動であった。

### 2)調査地点②河童橋左岸(河童食堂前)

調査地点②の主な観光行動は、上位から写真撮影、会話、飲食である。河童橋左岸、観光客からするとバスターミナルから歩いて最初のビュースポット手前の広場であり、最も多くの人を訪れる場所である。河童橋と吊尾根をセットにした写真撮影に最適で、最も多い観光行動が写真撮影となっている。また、ベンチが設置されており、会話を楽しんだり、飲食店で購入した商品を飲食したりする様子が見られる地点である。ここでの滞在傾向は、通過～40分の滞在と幅広く、行動も写真撮影、スイーツ等売店で購入したメニューの飲食、対岸で川に入って遊ぶ家族の姿が多く観察された。

### 3)調査地点③清水橋付近

調査地点③は清水橋のたもとで、思わず川面をのぞき込んでしまうような美しい清流に容易にアクセスできる場所である。水の流れと共に冷気も感じられ、手で水を触ることができ、魚やバイカモの観察など、自然観察の値が最も高い地点である。遊歩道沿いではあるが、写真撮影や自然観察、会話が多く、多くの人立ち止まるポイントである。ここでの滞

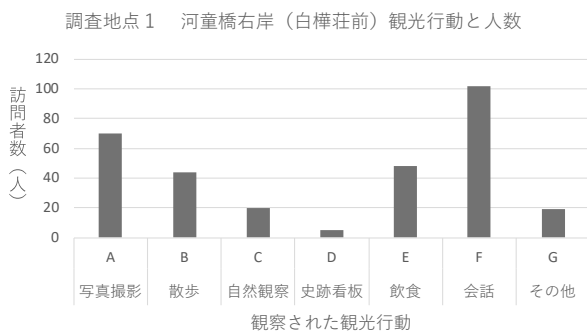


図7. 調査地点① 観光行動と人数

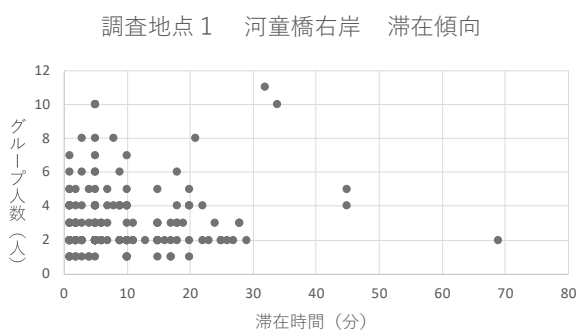


図8. 調査地点① 滞在傾向

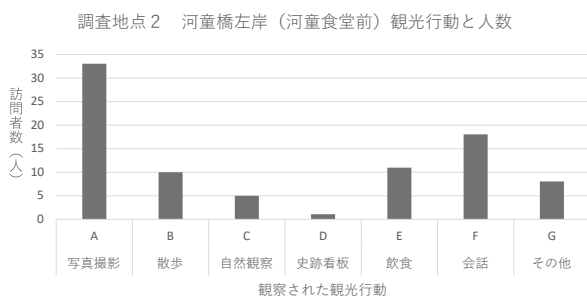


図9. 調査地点② 観光行動と人数

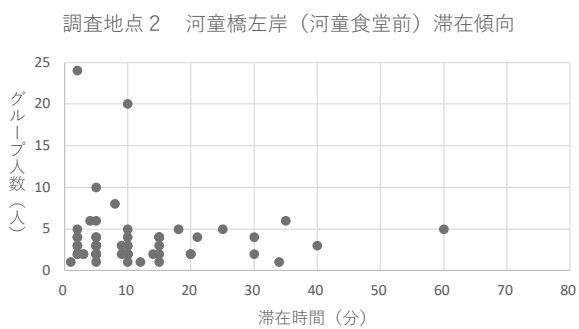


図10. 調査地点② 滞在傾向



在傾向は、グループサイズに関わらず10分以内が多数であり、全地点の中で最も自然観察が大きい割合で報告された地点である。インタープリテーションポイントでもあることから、団体が長く滞在するのは全てガイドツアーの解説であった。

#### 4)調査地点④小梨平ビジターセンター前

調査地点④はビジターセンターの前の広場であり、当日はパークボランティアが定点観測を紹介していたこともあり、自然観察に誘われる人が最も多いエリアとなった。ビジターセンター内でのミュージアムショップや展示を楽しむ人も多く、荒天時に訪問できる数少ない公共施設がある。当日は晴天であり、調査は屋内外での行動を両方観察した調査であるが、自然観察やビジターセンター内部の情報看板、及びミュージアムショップなどの閲覧が多く確認された。ここでの傾向としては、屋外は30分以内の少人数グループの滞在が多く、一つの団体ツアーで屋外の河童橋の遺構が解説されていた。50分を超えた滞在はいずれも夫婦で、椅子に座り休息して上高地の感想などを語り合う姿があった。

#### 5)調査地点⑤小梨平キャンプ場河畔

調査地点⑤は、キャンプ場に隣接する梓川と吊尾根のビュースポットである。少々奥地にあるため、ハイキングをしながら写真撮影に訪れる人が多い。歩みを止めずに歩き過ぎる人もあれば、のんびり椅子に座って本を読む人もいる等、それぞれの過ごし方がなされており、全地点の中で「その他」行動の数値が最も高い。キャンプ場でテント設営や野外炊事ができること、広さと展望と静かであることから、ツアーの立ち寄りも観察された。ここでの過ごし方は全地点で最もバリエーション豊かであり、動植物の観察や、休息、会話、読書など行動は多様である。ここでの滞在傾向は、通過から40分程度の滞在が主である一方、中には1時間以上なども多く、全地点で平均滞在時間が最も長い地点となった。

#### 6)調査地点⑥西糸屋山荘前

調査地点⑥は、西糸屋山荘前の通路及びベンチの設置された小さな空間である。遊歩道に並列に設置された複数の机とベンチのセットは、遊歩道が鎖状でハイカーからは木立にさえぎられて比較的プライベートが確保できる屋外空間であることから、席が

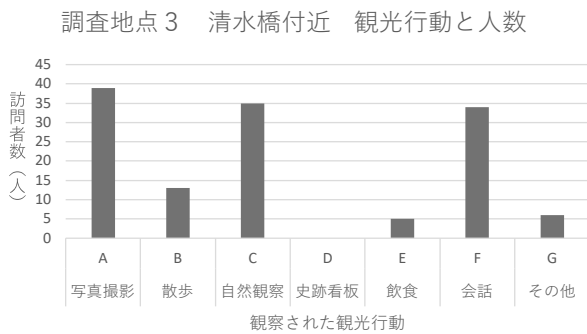


図11. 調査地点③ 観光行動と人数

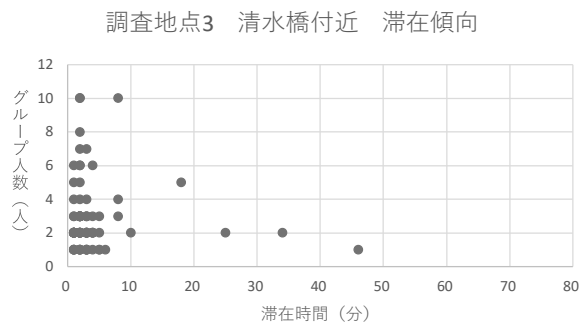


図12. 調査地点③ 滞在傾向

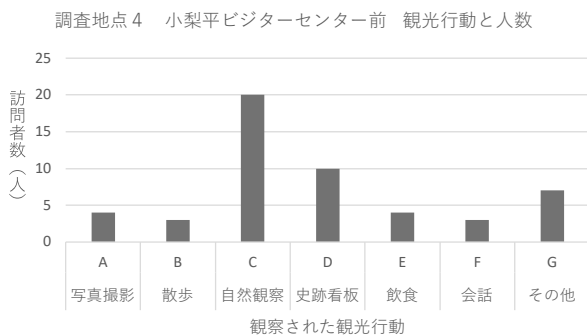


図13. 調査地点④ 観光行動と人数

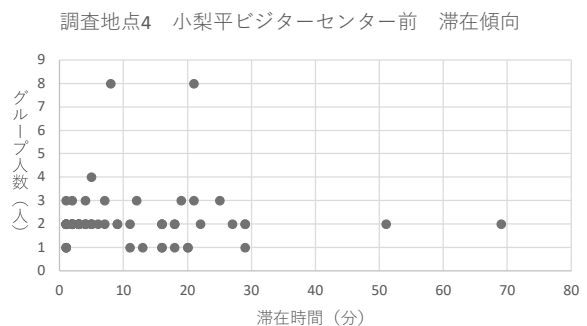


図14. 調査地点④ 滞在傾向

空いていれば留まり、様々に過ごす姿が見られた。遊歩道上であることから歩いて通り過ぎる人も多いが、河原へのアクセスが可能で、河原で遊ぶ姿や会話が多く、ベンチや河原でテイクアウトの食事や飲酒を楽しむなど、のんびり過ごす人が多い。6月16日はこの付近に野生の猿が現れ、観光客の注目を浴びていた。ここでの滞在傾向は、通過～40分程度の滞在が多数であり、ハイキングが多いながらも多様な観光行動が見られること特徴がある。

### 7) 調査地点⑦ ウェストン園地周辺

調査地点⑦のウェストン園地は、東屋とベンチがあり、近くにトイレもあり園地は広いことから、のんびりと過ごす人が多いエリアである。子どもが広場で遊ぶ姿を見守る親や、ハイキングの合間に昼寝をする観光行動が見られ、ウェストン園地内のみの平均滞在時間は20分程度であった。調査日の園地は、そこから遊歩道に続く木道が修理中であったためか、空きベンチが複数箇所見られるなど、園地の利用は通常よりも少なかった可能性がある。園地周辺は遊歩道の幅が広がっており、鎖状で自然へのアクセスが容易であると想定した地点である。トイレが設

置されており、河原が一望できる。遊歩道から河原に出られ、そこで遊ぶ家族の姿があった。ここでの滞在傾向は、少人数のグループで20分以内の利用が多数を占めた。

### 8) ウェストン碑広場

調査地点⑧のウェストン碑広場は、調査地点⑦とは20m程隣接しているが、歴史的興味への滞在が認められるとして独立地点とした。訪問者の多くは英国の登山家であり宣教師であったウォルター・ウェストンの記念碑を背景に写真撮影をした上で、近くに設置された史跡看板を閲覧する行動が多く見られた。人口密度がそれほど大きくないこの地点では、記念碑前を流れる小川の水に触れたり、小川を越える敷石を歩いたり、などの自然にふれる姿も観察された。ここでの滞在傾向は、少人数グループが多く15分以内が主であった。

### 9) 調査地点⑨ 穂高橋・田代橋

調査地点⑨は田代池、帝国ホテル、梓川左岸、梓川右岸と多くの遊歩道の交差点であり、橋の上は優れたビュースポットであるため、ふと立ち止まって写真撮影をする人が多い。橋の欄干から梓川を眺め

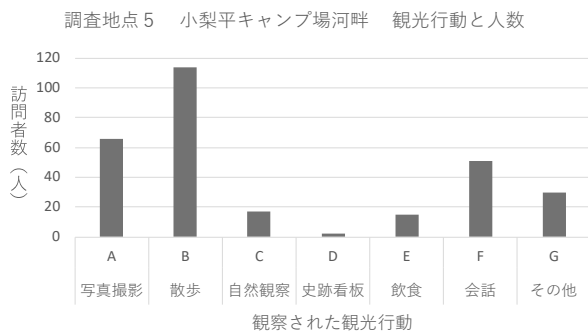


図15. 調査地点⑤ 観光行動と人数

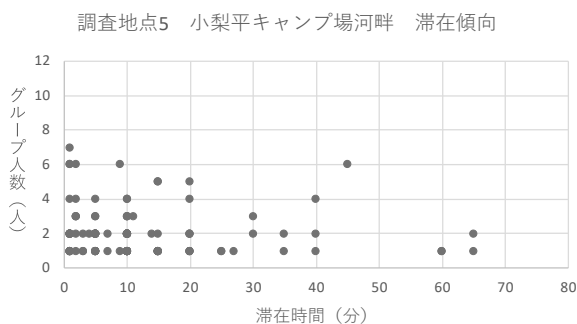


図16. 調査地点⑤ 滞在傾向

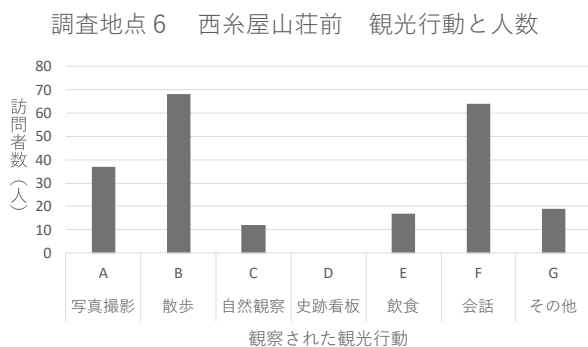


図17. 調査地点⑥ 観光行動と人数

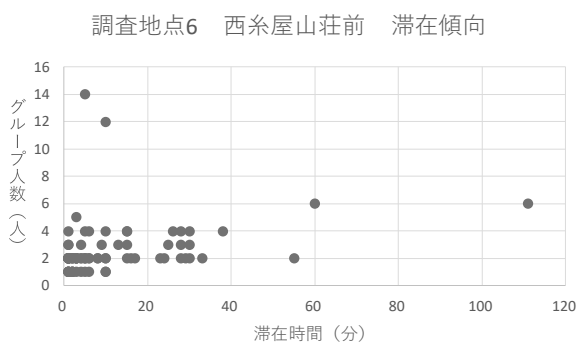


図18. 調査地点⑥ 滞在傾向

る人もいるが、滞在時間は比較的短い。本エリアでは調査時間内に地点にたどり着けなかったなどの調査時のトラブルで慌てていたこともあり、滞在時間の記載がないデータが多く存在する。大多数は写真を撮ったり、歩いたりする観光行動が観察されているが、たまに「梓川の近くのベンチとテーブルで、お弁当を食べていた」、「鳥などの生き物を観察しながら二人で話していた」、「あたりの森林の景色を見渡しながら会話を楽しんでいる」との記録もあり、一部ではあるがこの地点での滞在者が観察された。

### 10) 調査地点⑩田代池分岐

調査せず。

### 11) 調査地点⑪中野瀬園地周辺

調査地点⑪の中野瀬園地は梓川から少し離れた樹木に囲まれた園地で、景観としては森の中の平らな広場と、遊歩道上の交差点にあり、人が行き交う場所である。公衆トイレとベンチが設置されている。ここでの過ごし方としては、トイレへの立ち寄り、ハイキングの途中にベンチで休憩、ランチを取る、別々のツアー参加者が会話、看板地図で行先を検討、

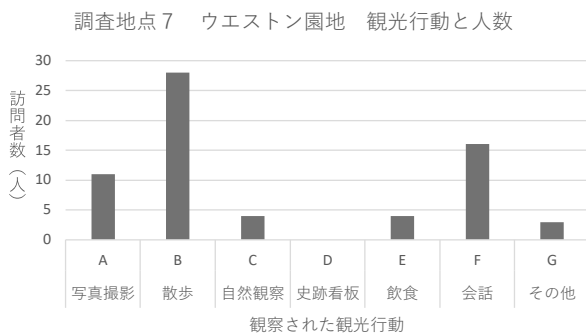


図19. 調査地点⑦ 観光行動と人数

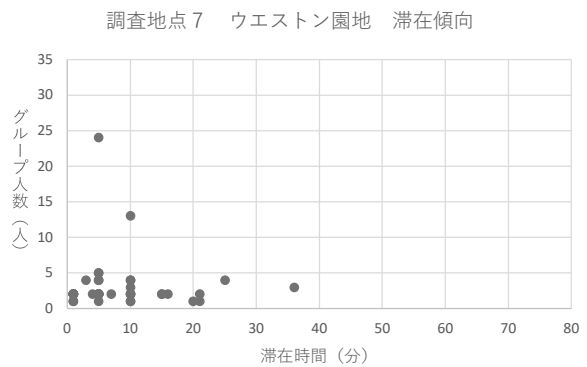


図20. 調査地点⑦ 滞在傾向

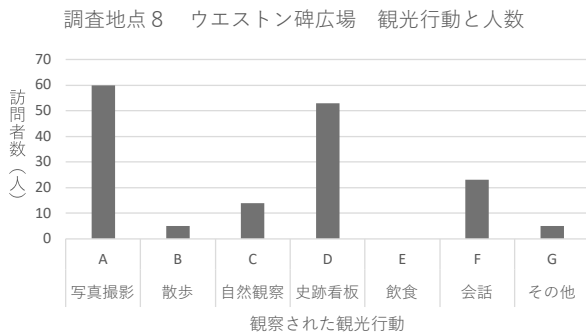


図21. 調査地点⑧ 観光行動と人数

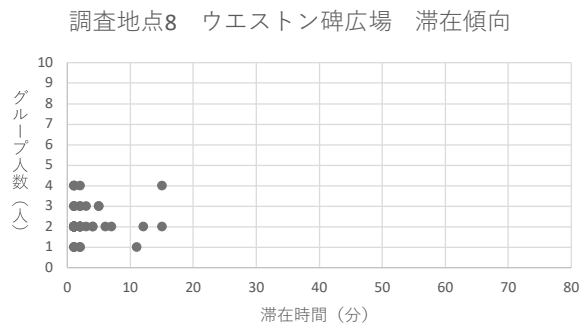


図22. 調査地点⑧ 滞在傾向

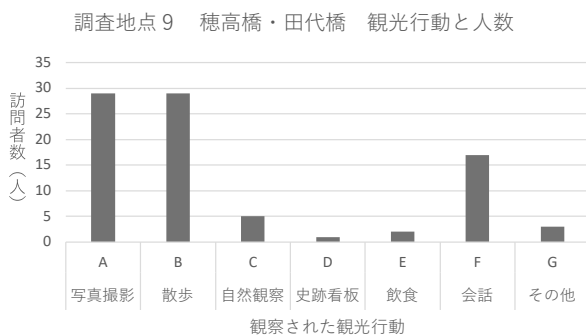


図23. 調査地点⑨ 観光行動と人数

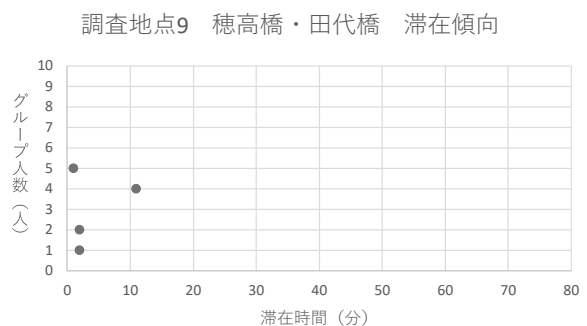


図24. 調査地点⑨ 滞在傾向

中には本を読む人も観察された。遊歩道として多くの人が交錯し、近隣にはない公共トイレの利用が多い地点である。記録には、「二人の小さな子供が、走り回って遊んでいて、親は食事をしながら子供たちを見守っていた」、「子供が刈り取った後の笹の莖を持っていたが、(国立公園での採取行動は禁止と)声を掛けたら理解してくれた」という出来事もあった。滞在の傾向は施設利用を中心に、30分以内が多数であった。

## 12) 調査地点⑫上高地帝国ホテル

調査せず。

## 13) 調査地点⑬吊尾根ビュースポット(梓川左岸河畔カーブ)

調査地点⑬は梓川左岸に位置する大きく川がカーブする外側の遊歩道上の地点で、吊尾根の景観が素晴らしい休憩スポットであり、ベンチとテーブルが複数設置され、解説看板がある。多くの人がハイキングで訪れ、休息し、写真撮影並びに会話を楽しんでいる。対岸の河原には20~30分程度の滞在で、ゆっくりと自然と親しむ観光行動も見られた。

## 14) 調査地点⑭梓川バスターミナル裏

⑭は、梓川左岸のバスターミナルにより近い遊歩

道上の地点で、足を止めても短時間で通り過ぎていく人が圧倒的に多い。ベンチがあるものの、ハイキングの起終点に最も近いこともあり、飲食行動は水を飲むなど軽く済ませるのが特徴である。滞在時間が長い人では、1人ベンチで休憩する、夫婦で景色を眺める、家族で記念撮影し軽食を取る、という観光行動が見られた。通過する人々の中には、手ぶらだけでなくキャリーバッグを持った旅行者、子どもを抱えた親があり、国籍も様々で、多様な観光客が観察された。

## 15) 調査地点⑮梓川左岸遊歩道 望遠鏡広場

調査地点⑮は調査地点⑭より上流のバスターミナル裏の遊歩道上の分岐地点で、調査地点⑭と同様ハイキングの起終点に近いことから、看板に掲示された行動計画に関する地図や注意書きについて情報収集をする人が多い。ハイキングのスタート時に当たる地点で、ガイダンスの位置づけで立ち止まる傾向がある。また、川や森にアクセスしようとする車椅子ユーザーの姿が観察された。

# V. 持続可能な観光経営の分析

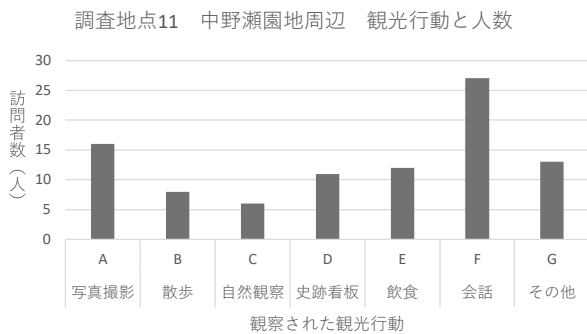


図25. 調査地点⑪ 観光行動と人数

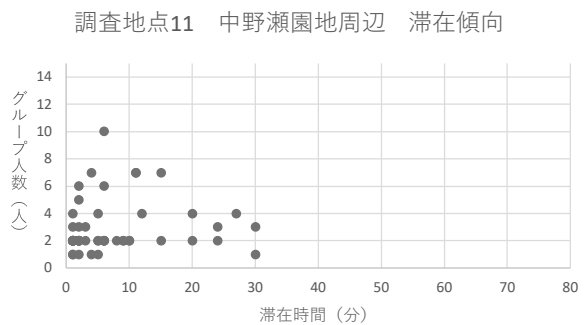


図26. 調査地点⑪ 滞在傾向

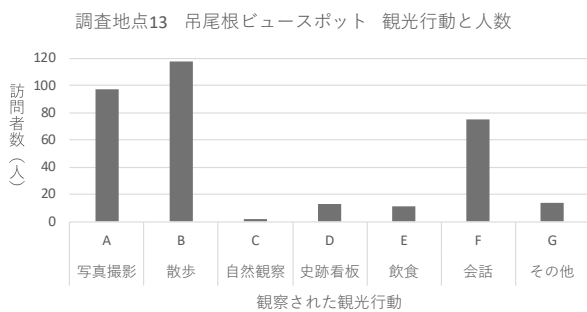


図27. 調査地点⑬ 観光行動と人数

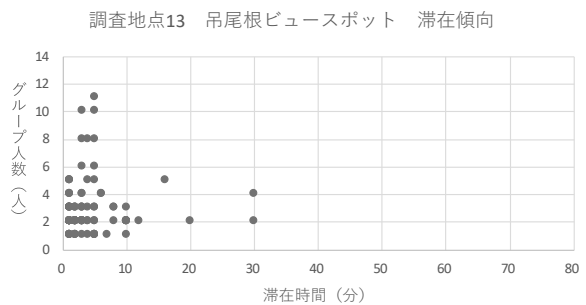


図28. 調査地点⑬ 滞在傾向

本研究は上高地における調査の結果から分析し、今後の受け入れのあり方を探ること、また、持続可能な観光へのモニタリング調査としての有効性を検証することが目的であった。

## 1. 上高地における観光行動の分析

まずはこれら統計と現地調査のデータを踏まえて、上高地の持続可能な観光地経営の視点から分析を行った。観光統計に見る概況は、有名景勝地としての上高地はこれまで国内観光客の訪問が主であったが、2015年以降の動向を踏まえると、春と秋にはアジアを中心とした訪日観光客の訪問がさらに増加していく傾向にある。また、国内観光客は引き続き夏季長期休暇の訪問ニーズも根強いことから、開山中は安定した来訪がある。

現地調査から見たのは、各調査地点での滞在時間は長いところで10分程度、その他は通り抜けが多数であり、広場等に設置した調査地点の滞在は短い傾向にある。これは上高地の観光施設がもっぱら遊歩道を中心に整備されていることと関連する。訪問

者の上高地の楽しみ方として、第一に非日常の自然環境にふれる散策があげられ、軽度な「歩く」という運動を伴う行動から派生したいくつかの楽しみ方が生まれている。各地点で実際に観察された行動は、前出の図6の通りにハイキング、写真撮影、会話がそれぞれ過ごし方の1/4を占めた。家族やグループ、または1人、2人で自己のペースで歩きながら目的とする景観を目に収め、自然景勝地の様々な現地の様子を楽しむ傾向が見られ、これは今後もあまり変わらないと考えられる。

調査シートに記載されたコメントには写真撮影が多く観察され、遊歩道を歩く目的は景観のハンティングでもある。訪問地の自然環境や生態系について疑問に思う会話は記録されており、解説するサービスが看板以外にもあれば、訪日観光客や国内観光客として非日常の環境への期待を前に、さらに多くのニーズとなる可能性がある。

### 1) 滞在時間の課題

さて、上高地をゆったりと楽しむという視点から、まずは各地点の滞在時間に着目する。滞在が相対的に長い地点は10分前後の平均滞在時間であり、具体

調査地点14 梓川左岸バスターミナル裏 観光行動と人数

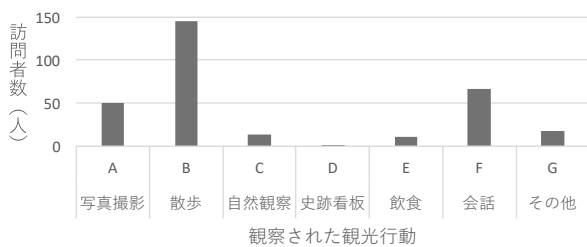


図29. 調査地点⑭ 観光行動と人数

調査地点14 梓川左岸バスターミナル裏 滞在傾向

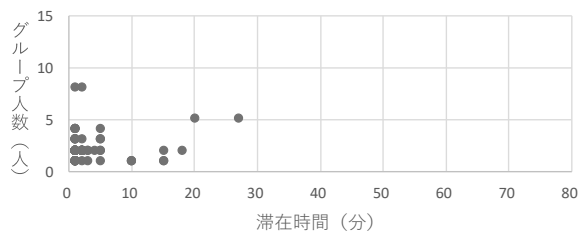


図30. 調査地点⑭ 滞在傾向

調査地点15 梓川左岸遊歩道 望遠鏡広場 観光行動と人数

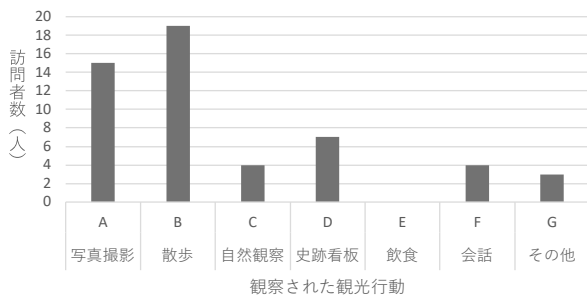


図31. 調査地点⑮ 観光行動と人数

調査地点15 梓川左岸遊歩道 望遠鏡広場 滞在傾向

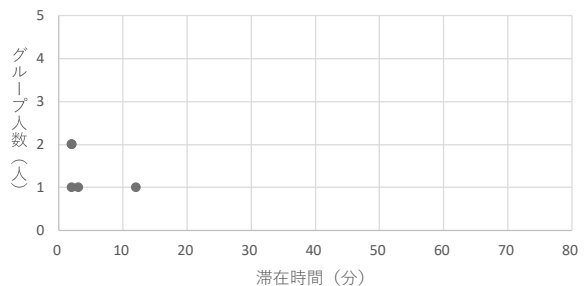


図32. 調査地点⑮ 滞在傾向

的には調査地点①河童橋右岸(白樺荘前)と②河童橋左岸(河童食堂前)、④小梨平ビジターセンター前、⑤小梨平キャンプ場河畔、⑥西糸屋山荘前、であった。これら地点に共通するのは、地点にある観光資源に対して滞在施設が整っていることであるが、その観光行動は地域内で最も多様であった。

例えば、調査地点①②では、多くの人が河童橋で写真を取る、ハイキングやジョギングで通り過ぎるほかに、カップルが木陰で涼みながらベンチに座って野鳥の声を聞きお互いの会話を楽しむ、河原に下りて子どもが遊んでいるのを親が写真を撮る、夫婦が河原で写真撮影をしてから裸足で川に入る、家族がベンチで持参のお弁当を食べる、少女が梓川の絵を描き、近くの観光客がそれを英語で会話している、家族や仲間とアイスクリームを食べて休憩する、一人または夫婦、登山グループ等が屋外レストランやベンチで飲酒をしながら景色を眺める、など観光行動は様々である。①②の河童橋周辺は上高地内でも最も人口密度が高く、各観光施設が用意するテラスや土産屋を利用する人のほか、晴天時には公共ベンチや木の根、河原を利用する人も多く見られる。特に公共ベンチは常に飽和状態であり、遊歩道も常に人口密度の高い状態であったことから、人気地点の広場、休憩場所については日中の時間帯の利用は施設のキャパシティを超えやすい。⑤小梨平キャンプ場河畔はテント設営場が木立内にあり、長時間滞在の適地である。河川堤防は幅が広く平らで視界が広がっていることから、キャンプ場の利用者だけでなく、多くの人が快適に集まることのできる希少で静寂な広場としてツアーの立ち寄りも多い。⑥の西糸屋山荘前は、遊歩道上でありながらも樹木による適度な閉鎖空間が保たれ、屋外ベンチとテーブルでの気兼ねない飲食が滞在時間の長さにも貢献していることが認められた。

一方、平均滞在時間が4分以内の調査地点は、③清水橋付近、⑧ウエストーン碑前、⑨穂高橋・田代橋、⑬⑭⑮の梓川右岸遊歩道の各施設設置箇所であり、過ごし方は多くハイキングや散策での利用である。公共のベンチ、テーブル、橋梁(眺めが良い)、看板が設置されている共通点があるが、それら施設が長時間の滞在を促してはならず、数分の休憩によく利用される。長時間の滞在が認められた地点との相違は、長時間滞在したい環境であるかという点である。

景観がよく広々としており、交差点になりうる場所が最も滞在時間が長い場所で、⑤の小梨平キャンプ場河畔や、カフェなどの民間施設が代表的である。このように、全体的にゆったりと過ごせる場所がある一定の時間については訪問者数に対して不足してしまう問題が浮かび上がる。各地点での過ごし方に合わせた施設を増やすだけでなく、動線を多様にすることで滞在が分散されることが望ましい。

## 2) 解説サービスにおける課題

次に、ゆったりと楽しむ際に発生する非日常の訪問地における疑問の解消、つまり解説サービスに着目する。調査地点④小梨平ビジターセンター前と、隣接する③清水橋の両地点は、全調査地点の中で最も自然観察行動が見られた場所で、清水橋は水面が遊歩道から近く、容易にアクセスできること、また、橋の上から水面を覗き込むことと魚等が観察できるので、通行者が自然に観察行動をとりやすく、短時間で移動する。一方、ビジターセンター前は調査日にパークボランティアが望遠鏡を設置し、「どなたも見られます」との表示をした上で、定点観測と解説を行っていたため、人の関わりによる自然観察へのいざないがあり、滞在時間が比較的長い。またビジターセンター前においては、他地点に見られる「写真撮影」と「散歩・ハイキング」の行動が極端に少なく、「自然観察」が最大値となっており、国立公園における望ましいふるまいがある。実際、ガイドが解説を始めると周辺の観光客が近寄ってきてその解説に耳を傾ける姿が見られ、自然観察へのニーズは無意識のレベルでも求められているし、デジタルでない直接体験が訪問地での醍醐味でもある。

人によらない解説看板は、調査地点④ビジターセンター前、⑧のウエストーン碑、⑪中野瀬園地、⑮梓川左岸遊歩道で利用する人が観察されており、訪問者の自然、歴史、地理に関する問いに答えている。事前の情報収集や自然への関心には個人差があるが、現地を訪問して初めて知りたくなる情報はどの訪問地にもある。そこで人による、人によらないなど、様々な媒体による解説サービスを提供するための施設やプログラムのあり方が今後の検討事項である。例えば、玄関口となるインフォメーションセンター、奥のビジターセンター、各看板の解説サービスの位置づけを再確認することも有効である。加えてパンフレット等の情報ツールも全体的な解説サービスの一

環にある。国立公園としてのこれら解説サービスに関する課題は、2023年度に上高地インタープリテーション全体計画策定事業が進行しているので期待したい。

### 3) エリア内分散の課題

次に訪問者の分散という課題に対し、滞在時間の偏差に着目した。この度の調査では調査地点①②④⑤⑥と、滞在時間が長い場所は、河童橋から小梨平の地点に偏っており、その他の地域は短く、つまり歩き通り過ぎていく状態で、滞在時間と人の多い地点が比例している。上高地内の多くの過ごし方として、下車地点から遊歩道を歩き続け、河童橋から小梨平で吊尾根を見て休憩するのが、一般的な観光行動と読み取ることができる。現状では観光客の上高地へのアクセスはバスかタクシーに限られており、下車地点となる大正池、帝国ホテル前、上高地バスターミナルを起点に、河童橋を最終目的地として往復または通り抜け、周回する3つの行動パターンに集約されやすい。さらに、乗車地点は上高地バスターミナルのみであり、上高地の日帰り利用が開門時間の影響で10:00~16:00に観光訪問が集中し、各地点での込み具合に一定のパターンが見られるという特徴にもつながっている。したがって、各地点の観察でも河童橋周辺と小梨平を除く多くの地点での観光行動は行動の多様性が少なく、楽しみ方についても局所集中が起こっている可能性がある。国立公園をゆったりと楽しむための課題として、河童橋以外の魅力的な地点を分かりやすく表示することで自主的な散策行動により分散を図ること、また、輸送サービスを再検討し、訪問者のエリア内輸送を多様化させるための方策が必要といえよう。

## 2. 調査手法としての有効性

1の分析を踏まえて、本調査が調査手法として有効かについて考察する。

### 1) 基準・指標の妥当性

この度の観光行動調査はGSTC基準におけるA. 持続可能なマネジメント分野の「8来訪者数と活動の管理」、またはC. 文化的サステナビリティ分野の「6文化的な場所における来訪者の管理」、D. 環境のサステナビリティ分野の「2自然的な場所における来訪者の管理」に関連して、それらの指標を参考にし

て設定した。GSTC基準は多くの議論を経て世界中の観光地に共通する状態に精査されていることから、指標のテーマ設定は妥当といえる。

### 2) 政策への貢献

この度の調査は「質的調査としての有用性の研究」よりも、「政策のための基礎データの取得実現性」に重きを置いたため、国籍による行動の違いは重要視せず、むしろ不確定な情報は排除すると判断した。基礎的データを得るためのモニタリング結果であり、同時刻に複数地点で観察を行うことにより、集団施設地区を中心とした一部エリアの来訪者の流れと行動を可視化することができた。このように具体的な観光行動を量・質ともにデータ化し、他の統計調査と合わせることで、より俯瞰的な状況分析ができ、データは地域内での共有が可能である。地元学生の実習の機会と合わせて実施しており、調査に関する現地の費用負担はない。この度の調査は今後「上高地ビジョン2024」<sup>注2</sup>と「上高地インタープリテーション全体計画」<sup>注3</sup>に対して、訪問者の類型や行動パターンを示す根拠として参考となる予定である。

### 3) 調査手法としての課題

これらメリットの一方で、抜き打ち調査のため季節による変化については不十分であること、調査には大量の人手がかかり、調査が増えることで記録のふれが生じやすいことや、継続性に関して不安が残る。これらのデメリットの改善については、定点カメラ設置による観察が考えられる。カメラを通して習熟した調査者による統一的な分析ができれば、慣れない人員でのデータの欠陥を補うばかりでなく、質的にも安定した正確なデータが得られやすい。ただし、映像の解像度と個人情報の保護、予算については慎重に議論する必要があることを添える。

## VI. 結語

本研究は、持続可能な観光地域を形成するためのモニタリングのあり方を発端として、上高地を事例に実際に訪問者の観光行動を質的、量的に調査し、観光統計を踏まえて利用者の状況及び現状の分析を試みた。そして、今後の上高地の観光客受け入れのあり方について考察を行うとともに、この調査手法を評価することが本研究の目的であった。

中部山岳国立公園南部地域・上高地における持続

可能な観光地経営を考えると、ゆっくりと滞在し  
たくなる環境の整備や、自然に親しむためのしかけ、  
エリア内での観光客の分散、の3点が課題としてあ  
げられた。また、調査手法についての評価は、具体  
的な観光行動が蓄積できることから今後の計画策定  
の基礎データとして有用であるが、調査データの質  
や人手がかかる等のデメリットの解消も必要であり、  
研究途上である。最後に学生の実習の一環で行った  
ことで、学生らの観光地及び観光学への理解や態度  
が高まり、産学官の地域連携の取組みとして、また、  
学生の参加型授業として大変効果的であったことを  
書き添えておく。

## 謝辞

本研究にあたっては松本大学観光ホスピタリティ  
学科丸山宗志専任講師よりご助言をいただき、また、  
環境省中部山岳国立公園事務所、松本大学観光ホス  
ピタリティ学科2023年度「観光概論B」受講生の実  
習としての協力があつたことを記し、深謝いたします。



参考資料

上高地実習 調査シート 調査日：2023年6月 日( ) 調査者氏名： \_\_\_\_\_、\_\_\_\_\_

調査地点：①河童橋右岸、②河童橋左岸、③清水橋、④ビジターセンター前、⑤小梨平キャンプ場川岸、⑥西糸屋前、⑦ウエストン園地、⑧ウエストン碑と対岸の河原、  
(該当に○) ⑨穂高橋・田代橋、⑩田代池分岐、⑪中の瀬公園とベンチ、⑫帝国ホテル前遊歩道、⑬吊尾根ビュースポット、⑭梓川バスターミナル裏、⑮梓川沿い望遠鏡広場

行動カテゴリ (5列目)：A 写真撮影、B ハイキングや散歩、C 植物や生き物の観察、D 史跡・看板等の鑑賞、E 飲食、F 会話、G その他

【滞在時間】 記入例) 11:00~11:20	【出身想定】見て想像する範囲に○、(その他・不明)	【人数】 ○人 (家族、ツアー客など属性も)	【行動カテゴリ】	【観察された観光行動】 例) 河原で子どもが石積みをし、親は主に川の水面を眺めながら話していた (この場合は左欄のカテゴリは、G,Fなど)
1	ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
2	ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
3	ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
4	ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
5	ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
6	ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
7	ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
8	ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
9	ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
10	ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
11	ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
12	ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
13	ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
14	ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
15	ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			

16		ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
17		ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
18		ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
19		ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
20		ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
21		ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
22		ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
23		ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
24		ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
25		ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
26		ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
27		ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
28		ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
29		ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
30		ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
31		ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
32		ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			
33		ヨーロッパ・アメリカ・アジア太平洋・日本・中東・アフリカ・( )			

## 注

- 注1 位置情報調査からは訪問者の国別により、松本市とセットで訪問する地域が異なる結果が出ている。欧米はゴールデンルート(東京—京都)の途中で松本に立ち寄り、アジア、インドは富山、岐阜などの周辺観光地と周遊して訪問している傾向が認められる。メキシコとロシアからの訪問者には山岳部が訪問地として知られていない傾向にある。
- 注2 「上高地ビジョン2024」に関する作業は2023年度に素案策定、2024年度にパブリックコメントを実施した上で、「上高地ビジョン2024(仮称)」として策定される計画である。
- 注3 「上高地インタープリテーション全体計画」は、自然解説行為としてのインタープリテーションが先行するアメリカの国立公園での取り組みを習い、日本の国立公園として初めて上高地にて全体計画を策定する事業であり、2023年度に環境省中部山岳国立公園事務所が進めている。

## 文献

- 1) UNWTO, “*Indicators of Sustainable Development for Tourism Destinations: a Guidebook*.” (2004). WTO, Madrid.
- 2) 二神真美, 「観光分野における持続可能性指標開発の系譜」『観光文化』, 37(1), pp.9-13(2013).
- 3) 岩田賢, 「サステナブル・ツーリズムの確立と観光指標の意義」『サービソロジー』7巻2号, pp.57-62(2021).
- 4) GSTC, *GSTC DESTINATION CRITERIA v2.0*, (2019), <https://www.gstcouncil.org/wp-content/uploads/GSTC-Destination-Criteria-v2.0-with-SDGs.pdf> (閲覧日2024.1.19).
- 5) 観光庁「日本版持続可能な観光ガイドライン」(2020), <https://www.mlit.go.jp/kankocho/content/001350848.pdf> (閲覧日2024.1.19).
- 6) 古屋秀樹, 「持続可能な観光にむけた戦略的観光地マネジメントに関する基礎的研究—鎌倉市を事例として—」『観光研究』Vol. 33/No.2, pp.21-34(2022).
- 7) 環境省自然公園制度のあり方検討会, 「今後の自然公園制度のあり方に関する提言」(2020), <https://www.env.go.jp/content/900502604.pdf> (閲覧日2024.1.19).
- 8) 横山篤美, 『上高地開発史』, 山と溪谷社(1971).
- 9) 横山篤美, 『実録柚人の村』, 郷土出版社(1982).
- 10) 長野県安曇村, 『開村130年のあゆみ』, 安曇村(2005).
- 11) 環境省, 『上高地ビジョン2014』(2015.3).
- 12) 松本市観光統計「松本市観光地延利用者数(年別 H24～R4)」, <https://www.city.matsumoto.nagano.jp/uploaded/attachment/75535.pdf> (閲覧日2024.1.19).
- 13) 松本市観光統計「松本市外国人宿泊者数(年別 H19～R4)」, <https://www.city.matsumoto.nagano.jp/uploaded/attachment/72170.pdf> (閲覧日2024.1.19).

- 14) 松本市観光統計「令和4年度観光データ調査分析事業レポート」, <https://www.city.matsumoto.nagano.jp/uploaded/attachment/74660.pdf> [【別冊】訪日外国人位置情報調査 国・地域別レポート], <https://www.city.matsumoto.nagano.jp/uploaded/attachment/75415.pdf> [令和4年度松本市インバウンド分析レポート\_抜粋版], <https://www.city.matsumoto.nagano.jp/uploaded/attachment/72174.pdf> (閲覧日2024.1.19).
- 15) JNTO 観光統計, 『訪日外客数の推移』, <https://statistics.jnto.go.jp/graph/#graph--inbound-travelers-transition> (閲覧日2024.1.19).
- 16) 中部山岳国立公園南部地域利用推進協議会, 『中部山岳国立公園南部地域利用促進プログラム2025』, pp.10(2021).